

# 第一章 光る源氏没後の物語 光る源氏の縁者たちのその後

## [第一段 匂宮と薫の評判]

\*光隠れたまひにし後(出家御決意後九年を数え、光る君がお隠れなさった後の今は)、かの御影に立ちつぎたまふべき人(その御威光に立ち並びなさりそうな方は)、そこらの御末々にありがたかりけり(多くの御子孫の中にもいらっしやらなかったのです)。\*「ひかり」は「隠れたまひにし」と敬語遣いなので<光君>のことであるのは確かだ。幻巻末は「朔日のほどのこと、常よりことなるべくと、おきてさせたまふ。親王たち、大殿の御引出物、品々の祿どもなど、何となう思しまうけて、とぞ」と結ばれていた。そして、この巻頭に「光隠れたまひにし後」とある。その幻巻自体もそそくさと話をまとめるようなぎこちなさを感じたが、それでも大きな話を「とぞ」と切り上げる語り口は、言葉を尽くそうにも、人目を避ける隠遁生活では別人を狂言回しに仕立てることになって話の趣が変わってしまうし、かと言って盛大な葬儀を語っても、「光」が消滅した演出を十分に果たせず、それならいっそ、何も語らないあっけなさで余韻を持たせる、という手馴れた常套手段の趣はあった。だから読者にとっては、幻巻が作者に意図された終章だったにせよ、後世に作為された構成であるにせよ、そこで一旦は「物語」は終わっている。少なくとも、幻巻末から、この「光隠れたまひにし後」にそのまま直ちに続けて語られる物語で無いことだけは、主人公を欠く内容から明らかで、別人の手か、同じ作者でも、一定の間を置いた上での執筆だと考えて読み進みたい。そして正に、此処に記された「光隠れたまひにし後」という言い方自体が、本編の後日談であることを宣している、かと思う。概要に「薫君の中將時代十四歳」とあることから、当巻は幻巻末から九年後の話になるらしいので、あえてそのことを補語して、物語構成を整えたい。ただし、光君の死亡が何年前のことなのか、幻巻末直後なのか、当巻の直前なのか、その中間なのか全く分からず、九年という時間経過は出家決意後としか言い表しようがない。

\*下りゐの帝をかけたてまつらむはかたじけなし(冷泉院を光君の御子とお見立て上げ申し奉るのは畏れ多いことです)。\*「おり位のみかど」は<退位帝=上皇=院>で、注には<冷泉院>とある。「冷泉院」は光君の実子だが、それは絶対秘であり、表向きは桐壺院の末子、朱雀院の弟宮であり、「かの御影に立ちつぎたまふべき人」として取り上げることなど許されない存在だ。それと、「下りゐの帝」の「帝」だが、これは「みかど」と発音したようだが、意味も「帝(てい、取り締まる)」ではなく、当時の語感では「御門」という<ひとかどの人>という、身近な、とは言え当然に雲上世界でのことではあるが、生活感のある呼び方だったように聞こえる。何処か生々しい響きがある。だがしかし、帝位に就かない者には決して「みかど」と呼ばないという意識が組織体系の認識として強まり、それが長く続けば、その呼称は非常に権威化する。それが高じれば、更に畏怖を示して呼称自体を避ける、その意向を付度する、という行動姿勢によって各自が組織体系上の保身を図る。保身自体は健全な行動様式だ。規律正しい生活は多くの者が楽に生きられる。問題は保身で組織構造に柔軟な対応能力が担保されなくなる点だ。経済が上手く回らない時には保身姿勢が組織の形骸化を知る一つの指針になる。その組織の閉鎖性は人間社会の一つの完成形ではあるが、完成形の有効性はいつでも限定的だ。

\*当代の三の宮(今上帝の第三王子と)、その同じ御殿にて生ひ出でたまひし\*宮の若君と(同じ六条院でお育ちになった女三の宮腹の御子の)、この二所なむ(この御二方が)、とりどりにきよらなる御名取りたまひて(それぞれ美形だという御評判をお取りになって)、げに、いとなべてならぬ御ありさまどもなれど(確かにとても平凡では無い優れた御器量同士だが)、いとまばゆき際にはおはせざるべし(本当に光輝くほどのところまでではいらしやらないようです)。\*「たうだいのさんのみや」は<今上帝の第三親王、すなわち匂宮。>と注にある。明石姫腹の若宮で、光君の御孫だ。当巻の

話が幻巻末の九年後というのは、いつ本文で明示されるのかまだ分からないが、冒頭で薫君の年齢からの計算で〈九年後〉は明示補語してしまったので、幻巻で6歳だった「三の宮」が15歳になっていることは承知しておいて支障はないだろう。ところで、「匂宮(にほふみや)」は当巻の記事からの便宜呼称なのか、本文にそういう呼称があるのか、何れにせよ、当巻以降に表われる呼称だろうから、先読みで注記に使うのには反感する。私は、便宜呼称は読者というより研究者の身勝手な語用に思えて、作者に失礼なのは勿論のこと、一般読者にも誤解や偏った先入観を与えかねない危険な扱いで、「葵の上」のように客観名称が全く示されないながらも重要な配役といった例外を除けば、極力本文表示に従う呼称を用いるべきだと思うし、まして本文表示以前にその因語を使うのは厳に慎むべきであり、止むを得ない場合があるなら、その釈明に十分努めるのが望ましい態度と固く信じる。\*「宮の若君」は注に〈女三の宮の若君、すなわち薫。〉とある。実は故衛門督藤原君との不義の子で、表向きは光君の御子。今上帝の第三親王の一歳下なので14歳。

ただ世の常の人ごまに、めでたくあてになまめかしくおはするをもととして(ただ世間一般の人としてとても美しく上品で生き生きしていらっしゃるのを素地として)、\*さる御仲らひに(その同じ家で育ったという御二人の仲の良さに)、人の思ひきこえたもてなし、ありさまも(宮中で皆が考え申し上げる御二人への対応態度や処遇様式なども)、いにしへの御響きけはひよりも(故光君御一人に対する御評判事情よりも)、やや立ちまさりたまへるおぼえからなむ(やや目立っていらっしゃる印象からか)、かたへは(却って)、こよなういつくしかりける(御二人揃っての御威勢は非常にあったのでした)。\*「さる御仲らひ」は、この構文全体の主語に見えるが、一体何を指しているのか。「なからひ」は大辞林に〈人と人との関係や間柄。〉または〈一族。血統。〉とある。「血統」の語用で「なからひ」を読めば今上帝から見て、三の宮は子であり、女三の宮腹の若君は妹宮の子で甥に当たる〉という意味合いになって、桐壺帝から見た光君と当時の頭中将藤原殿の間柄に似ている、という作意が示される。しかし当文の論旨は、「いにしへの御響きけはひ(故人である光君の御評判や御立場)」に〈似ている〉ということではなく、「やや立ちまさりたまへるおぼえ(やや優位な事情)」を理由立てとして、この「二所」が「こよなういつくし(非常に威勢がある)」と説明する論理展開になっている。それも、血筋の良さはあるものの、家柄としては家父であった光君は故人であり、光君の実子の源君は今も大将なのか、もう大臣になっているのかも分からないが、三条邸に独立した家を構えていて、専ら女三の宮の手前を憚っているのかも知れないが、六条院全体の大主人の立場には納まっていないようで、六条院の実勢は光君時代に定まった荘園配分を維持するに留まり、中宮の実家なのだから一部では予算執行の川上として王家の消費性向は強まるかも知れないが、それは即ち確立された高家の地位であり、王族権威と藤原氏の実効支配力との均衡の上に立つ優越的存在としての自律的な勢力拡大は、実は是以上は見込めない情勢だった、と推測できるにも関わらずだ。つまり、十四番目の月の勢いはなく、満月の輝きはあるものの、後は十六夜から次第に翳り行くのみという寂しさとなると、此処で言う「なからひ」は〈家柄・血統〉ではなく、正に「二所」の〈間柄=仲の親しさ・近さ〉のことであり、「さる」というのは上文の「その同じ御殿にて生ひ出でたまひし」という事情を丸々受けた言い方と読んで置く。

\*紫の上の、御心寄せことに育みきこえたまひしゆゑ(紫の上が御愛情を殊に寄せて御育て申しなされたので)、三の宮は、二条の院におはします(三の宮は故上の実家とも言うべき二条院に住んでいらっしゃいます)。\*「紫の上」という呼称が本文で明示されている。また、それが主語の明示にも成っていて、こういう文は分かり易い。

春宮をば(長男の皇太子については)、さるやむごとなきものにおきたてまつりたまて(次期帝として特別に尊重申し上げなされたが)、帝、后、いみじうかなしうしたてまつり(帝も后も非常

に可愛がって)、かしづききこえさせたまふ宮なれば(お世話申し上げあそばすこの三の宮なので)、内裏住みをせさせたてまつりたまへど(御所にお部屋を設け申し上げあそばしたが)、なほ心やすき故里に(やはり三の宮は気楽な二条院に)、住みよくしたまふなりけり(専ら住んでいらっしやいました)。\*御元服したまひては(御元服なさってからは)、兵部卿と聞こゆ(兵部卿と申し上げます)。\*「元服」は<十二歳前後が多かった>と古語辞典にあるが、まだ三の宮の年齢は明示されていない、とは即ち、幻巻末からの時間経過は明かされていない。が、三の宮が成人していることと「兵部卿(ひょうぶきやう、軍事事務管理長官)」という扶持の肩書きで呼ばれていた事が示された。

## [第二段 今上の女一宮と夕霧の姫君たち]

\*女一の宮は(今上帝の第一内親王は)、六条の院の南の町の東の対を(六条院南町の東の対を)、\*その世の御しつらひ改めずおはしまして(祖母の生前の御部屋模様をお変えなさらずに)、朝夕に恋ひしのびきこえたまふ(日頃から故紫の上を恋い偲んで暮らしていらっしやいます)。\*「をんないちのみや」は注に<明石中宮腹の女一の宮。匂宮とともに紫の上に養育されていた。>とある。\*「その世の御しつらひ」は注に<紫の上在世当時のお部屋の模様。>とある。

\*二の宮も(今上帝の第二親王も)、\*同じ御殿の寝殿を、時々御休み所にしたまひて(同じように六条院南町の寝殿を母宮の実家ということで時々お立ち寄りなさるお寛ぎ場所になさって)、\*梅壺を御曹司にしたまうて(後宮の凝花舎を本拠になさって)、\*右の大殿の中の姫君を得たてまつりたまへり(右大臣である今の源氏殿の次女を娶っていらっしやいました)。次の坊がねにて(今の東宮に次ぐ次期帝候補として)、いとおぼえことに重々しう(注目されて大事にされて)、人柄もすくよかになむものしたまひける(人格もしっかりしていらっしやいました)。\*「二の宮」は注に<今上帝の第二皇子、東宮の弟、匂宮の兄。>とある。第一親王は皇太子だ。皇太子は明石中宮が12歳で産んだ御子で、中宮后はこの年で33歳になるので、皇太子は21歳。三の宮が15歳なので、二の宮は17歳くらい、女一の宮は19歳くらい、だろうか。二の宮と女宮については今までに年齢の明示は無い、かと思う。因みに今上帝は35歳。\*「同じ御殿(おなじおとど)」は「女一の宮」と同じ>「六条の院の南の町」という言い方だろうか。こういうものの言い方は以前には無かった、ような気がする。「時々御休み所」という言い方も珍しい。尤も、若宮が六条院を母の実家として親しむ、ということ自体が、王家にとっては新しい生活様式ではあるのかも知れないが。\*「梅壺」は凝花舎(ぎょうくわしゃ、後宮五舎の一つ、飛香舎・藤壺の北隣)の通り名で、前庭(箱庭)に紅梅と白梅が植えられていた、とのこと。冷泉帝時代は秋好中宮の部屋だった。\*「右の大殿の中の姫君」は注に<夕霧の女、中の君。雲居雁腹の姫君。>とある。「右の大殿(みぎのおほいどの)」は<右大臣>で、大将源君のことらしい。右大臣就任は初めて明かされたこと、かと思うが、周知の事実のような書き方だ。「雲隠」巻にでも語られていたのだろうか。源君も40歳になる勘定で、光君亡き今や、今後はこの人を源氏殿と称すべきなのだろう。

\*大殿の御女は(おほいどののおおんむすめは、源右大臣の御息女は)、いとあまたものしたまふ(大勢いらっしやいます)。\*「大殿」は与謝野訳文に<源右大臣>とある。分かり易い表示なので支障が無い限り謹んで踏襲したい。

大姫君は(おほひめぎみは、御長女は)、春宮に参りたまひて(東宮に入内なさって)、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ(他に競い合う相手も無い優位さで皇太子にお仕え申しなさいます)。その次々(それに次ぐ御令嬢方も)、なほ皆ついでのままにこそはと(更に皆が同様に弟

の親王方に嫁ぐものだろうと)、世の人も思ひきこえ(宮中でも思惑申し)、後の宮ものたまはすれど(姫からは叔母で宮からは母である明石中宮も仰るものの)、この兵部卿宮は(第三王子の兵部卿宮は)、さしも思いたらず(そのようにはお考えでなく)、\*わが御心より起こらざらむことなどは(自分から懸想が起こらない相手との結婚などは)、すさまじく思しぬべき御けしきなめり(気が進まないと思ひの御様子らしいのです)。 \*「わが御心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬべき御けしきなめり」は与謝野訳文に<恋愛結婚でなければいやであると思っておいでになるふうなのであった>と言い換えられてある。基本的な文意は、三の宮が恋愛志向であり情熱家らしい、ということだろうから、「恋愛結婚でなければいや」という表現での言い換えも許容範囲の内とは思ふ。が、そも「恋愛結婚」というものが当然に相当な限定条件の許でしか成立しないもの、とは言え其れは実際の生活が多くの限定条件で成立しているのとはほぼ同義で、多くの場合は普通の生活での出会いの中にあるものだが、三の宮は高所にいるのであり、「恋愛感情」は生理反応を伴う一種の虚構だ、ということだけは大前提の認識として押えて置きたい。勿論そうした感情に命を賭けるに足る価値を覚える人生が空虚な筈は無い、とは思ふが、それ以外の人生が空虚だという理念に囚われるのも教条や御題目の類に過ぎない。などというノートをする意味は私自身にとっては殆んど無いのだが、昨今の風潮では、「恋愛結婚」という語に偏った理想幸福像を持つべきであるかのようなアメリカ式というかハリウッド式というのか、金融商業主義に踊らされたキリスト救済法の強迫観念が蔓延っていて、少なくともヨーロッパ式くらいの屈折した史観でものを考えるべきかと思うが、まして是は日本の日本語の平安期の王朝期の封建的な階級社会での物語であり、その辺の誤解だけはくれぐれも避けたい、という気持を表して置く。

\*大臣も(姫君の父親の源殿も)、「何かは、やうのものと(何もそのように決め付けて)、さのみうるはしうは(それだけが慶事とは、狭量な)」と静めたまへど(と静かに構えていらっしゃるが)、また、さる御けしきあらむをば(かと言って、宮方からそうした御意向があれば)、もて離れてもあるまじうおもむけて(縁遠くならないように御膳立てを整えるべく準備して)、いといたうかしづききこえたまふ(それはもう手厚く姫君たちを教養高く御養育申しなさっていらっしゃいます)。 \*「大臣(おとど)」と「大殿」を呼び換える意図は何か。対象者の外見または客観的な視点での呼称が「大殿」で、内見または主観的な視点での呼称が「大臣」、と今のところは見て置く。なので、此处では「大臣」を<源殿(みなもとどの)>と呼んで置く。「光る君」の晩年を<源氏殿>と呼んでいたのが紛らわしいが、「大殿」も40歳なので<源君>で通すのも変だし、今後は基本的に<源殿>と呼び、「光る君」は<故光君>と示して混同を避けたい。支障があれば再考するが、この人物を<夕霧>に紛れた一場面の印象で呼ぶよりはマシかと思う。

\*六の君なむ(中でも六女は)、そのころの、すこし我はと思ひのぼりたまへる親王たち、上達部の(当時の少しは自分が相手に相応しいと自惚れなされた王族や貴公子たちの)、御心尽くすくさはひにものしたまひける(歓心を引く語り草の美人でいらっしゃいました)。 \*「六の君」は注に<夕霧の六の君、典侍腹の姫君。後の「宿木」巻で、匂宮と結婚する。>とある。先読みの注だが、示された以上は留意したい。が、むしろ私が気になるのは、話の流れでこの「六の君」は「その次々」に該当する<六姫>なのだろうと察するが、なぜ「六の姫」と書かないのか、という点だ。「きみ」は男女共通の尊称だとしても、大勢いる子供たちの話なので、少しでも客観的に特定できる分かり易さを普通の執筆態度に持つなら、「六」や「姫」という言葉はあるのだから作者は「六姫」という語を使うべきものに思うが、この感性の違いは苛立つ。

### [第三段 光る源氏の夫人たちのその後]

さまざま集ひたまへりし\*御方々(様々な形で集りなされた光君の御部屋様方は)、泣く泣くつひにおはすべき住みかどもに(光君のご逝去で、泣く泣く終の棲家となさるべき小構えの家々に)、皆おのおの移ろひたまひしに(皆各自お引越なされたが)、\*花散里と聞こえしは(花散里と申し上げた王家筋の御方は)、\*東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける(二条東院を御遺贈分所領として賜わって移住なさいました)。 \*「おおんかたがた」は注に<六条院の源氏の夫人たち。女三の宮、花散里、明石御方たち。>とある。が、「さまざま」とあるのは二条東院に囲われていた空蟬や末摘やその他の女たちまで、存命なら含まれるかに聞こえる。が、それはそれとして、むしろ気になるのは、此处でそれらの去就が語られることの違和感だ。いや、話としてはこのような記述が有る方が分かり易いのだが、むしろ、こんな記事は無い方が自然、と思える奇妙な感覚だ。既に上文までに若宮や若君たちの成長振りが語られていて、ということは、「御方々」の近況はともかく、その六条院からの転居などは、それに遡って片付いていた筈の事柄だろうし、その時系の逆転が変というよりも、光君の死が割と最近のことだとしても、事柄の意味として、此处で如何にも為にする事情説明のような、まとめて整理された語り口になっている事の、その整合性が、却って変だ。却って、というのは「雲隠巻」の存在を前提とするなら、「御方々」の光君没前後の描写は其処に記されてあるべき事柄であり、その内容の充実度は別として、単に「皆おのおの移ろひたまひし」だけで済まされていたとしても、此处で妙に丁寧に説明があるのは前例に反し、今までなら何かの折に唐突かつ個別に、周知の事実として行き成り別事情が語られるのが常で、此处にある語りは「雲隠巻」が存在しない、または存在しないことにされた傍証にさえ思える。もっと言えば、より史実から離れた似せ物語の便乗を以下に語るという姿勢を示しているようにさえ見える。いや、それでも王朝を味わうには支障は無い。事実は可能性の発現の一結果であり、可能性は虚構の中でしか描けないからだ。時代の可能性を考えるのは文芸という人間観察の味わいの大きな要素だ。史実だけを追う事が最も思索を刺激されるという特異な才能は私には乏しい。 \*「花散里」は光君よりは数年と年配の印象で、存命なら光君はこの年で61歳になる筈で、推定だが花散里は65歳以上になっているように思う。 \*「ひんがしのみん」は<二条東院>と訳文にある。二条東院は三十年前に二条院の東隣の土地に造営された。二十六年前に六条院が落成して移住したので、花散里は二条東院には四年間ぐらいしか住んでいなかったが、当時の学生源君を母親代わりで育てた思い入れの濃い屋敷なのかも知れない。「処分(そぶん)」は処遇分=遺贈分だろうか<遺産>と大辞泉にあり、確かに花散里が東院を預けられていたことは松風巻に記されていた。当然、東院を賄うに足る荘園分も寄贈されたのだろう。

\*入道の宮は、\*三条の宮におはします。 \*「入道の宮」は、朱雀院の女三の宮であり、光君の未亡人であり、六条院の若君の母宮だが、現代語文として分かり易い現在での呼称は、実は「入道宮」のように思える。以前は「入道宮」というと<藤壺入道宮>と混同しがちにも思えたが、光君亡き今や「藤壺中宮」は完全に<故宮>であり、登場場面も無さそうだし、回想で登場する場合はそのように明示すれば済むので、混同の恐れは少ない。 \*「三条の宮」は朱雀院の出家に伴う女三の宮が得た御処分所で、柏木巻や特に鈴虫巻一章四段には光君が宮を整備したことなどが記されていたが、入道宮の移住自体は幻巻の時点でも許されず、宮は六条院南町寝殿西側に住み続けていたように思う。若君の養育もあったので三条宮に引き込むのを遅らせていたという事情もありそうだが、光君の出家に伴って移住したのか、そも光君の出家生活があったのかどうか、あったとしてどんな様子だったのか、そも光君はいつ逝去したのか、などが今のところ不明で、入道宮がいつ三条宮に移ったのか、その辺の事情は分からない。が、花散里が「東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける」と、その移住が最近の事柄のように語られたのとは少し違う事情であるかのように、入道宮は「三条の宮におはします」という言い方になっていることから、宮の移住は以前から続いていたような印象だ。が、何れ子細不明ではある。ただ、今現在は、入道宮=三条宮、という分かり易い図式になっている、とは見て良さそうだ。が、となると、六条院はやはり源右大臣が全体の維持管理している、と

ということだろうか。とは言え、既にいくつか語られているように、南町の東の対は今上の女一の宮が、寝殿の少なくとも一角は今上の二の宮が、そして当然に今後の実家であり、西町は当然に秋好中宮の所領であり、各町の実情は規定路線上でほぼ決まっているのだろうが、それでも六条院全体の広大さを思うと、何れにせよ、光君没後の今現在は何とも手余り感が漂う。それが、ひとつの〈光君の存在感〉の大きさの表れでもありそうだ。

\*今后は(今後の明石中宮は)、内裏にのみさぶらひたまへば(光君のご逝去後は、御所にばかりいらっしやって)、院のうち寂しく(六条院の中はひっそりとして)、人少なになりけるを(人少なくなっていたので)、右の大臣(右大臣の源殿は)、 \*「今后(いまぎさき)」は注に〈今上帝の明石中宮。冷泉院の秋好中宮に対して「今后」という。〉とある。この人は如何呼称すれば良いのだろう。今現在なら正に「今后」で良いだろうが、一貫した個人を客観的に特定できる呼称となると、やはり〈明石中宮〉になるだろうか。「明石中宮」という言い方は本文には無い。が、「明石の君」腹の「若君」が二条院の「姫君」として引き取られる涙の子別れの場面が薄雲巻一章四段の雪の日にあり、紫の上を養母に持つその「明石君腹の姫君」がやがて東宮に入内し、第一妃として子を儲け、その東宮が即位し、その「女御」となった〈明石姫〉にやがて中宮の宣旨が下った、という経緯からして〈明石中宮〉という呼称は本文に沿ったもの、とは言えそうな気がする。この人も33歳になっているようで、この人の視点での栄華物語もなかなか内容豊富そうで一興に思える。ついでに「秋好中宮」だが、この人はまだ生きて居るのか、生きていれば52歳くらいで、出家願望の話題もあったがどうしているのか。ところで、この〈秋好中宮〉という呼称は私としては好ましくない。「秋好(あきこのむ)」は本文に無いばかりか、紫の上との春秋争いという逸話に因む、とは言え其が其なりに人物像を表わしてはいそうだが、という頼り無さで、どうせ客観的な固有名の明示が無くて物語の設定に因る呼称なら、伊勢の斎宮を勤めたので斎(さい、いつき)に因んで〈斎中宮〉とか、冷泉院の中宮なんだから〈冷泉中宮〉あたりが良さそうにも思うが、其等も何れ本文に無いということなら、広く一般に使用されているらしい〈秋好中宮〉に習って置けば良いか、といったところだ。しかし、是は特に支障が無さそうだと思う〈葵の上〉と並ぶ例外の一つで、私は基本的に本文に無い呼称は避けたいし、固有名が無く止むを得ず便宜呼称する場合も、本文で使用された語に沿いたいので、多くの一面的な便宜呼称には習えない。

「人の上にて(他人事として)、いにしへの例を見聞くにも(昔の例を見聞きするにも)、生ける限りの世に(存命中に)、心をとどめて\*造り占めたる\*人の家居の(心を込めて熱心に建てて住んでいた豪邸が)、名残なくうち捨てられて(見る影も無く廃れて)、世の名残も常なく見ゆるは(世の無常そのままに見えるのは)、いとあはれに(本当に悲しく)、はかなさ知らるるを(寂しい限りなので)、わが世にあらむ限りだに(私の目の黒い内は)、この院荒さず(この六条院を手入れして)、\*ほとりの大路など(周囲の大路なども)、人影離れ果つまじう(人影が見えないような衰えにさせたくない)」 \*「造り占む(つくりしむ)」は〈造営して占有する=建てて住む〉。 \*「人の家居」は〈住宅〉のことだが、「いにしへのためし」として語り継がれるのは普通の家ではなく〈大邸宅〉のことだろう。 \*「ほとりのおほち」については、大林組の「季刊大林」の「六条院の復元」考証ページによるとくでは六条院は、どのあたりにあったのだろうか。平安京の都市計画にしたがえば、南北を六条大路と六条坊門小路に、そして東西を京極大路と万里(まで)小路とに囲まれた一郭と推定した。現在の京都で分かりやすくいえば、鴨川に近い六条通りの北側、河原町五条の交差点をふくんだ一帯に相当する。〉とある。

と、思しのたまはせて(とお考えを仰って)、丑寅の町に(夏の東町に)、かの\*一条の宮を渡したてまつりたまひてなむ(あの夕霧以来の一条宮にお移り頂きなさって)、\*三条殿と(三条邸の妻と)、\*夜ごとに十五日づつ(一晩置きに月に十五日づつ)、うるはしう通ひ住みたまひける(律儀に通い分けて住んでいらっしやったのです)。 \*「一条の宮」は朱雀院の女二の宮で衛門督藤君の未亡人で

あった女を源殿が珍しく強引に娶って祝言を上げた宮。妾ではなく妻として処遇すべき格式高い良女。一条宮邸自体は朱雀院の更衣であった女二の宮の母宮の所領。母宮自身が王家筋だ。「一条宮」に子は無い、かと思う。推定 37 歳。 \*「三条殿」はかつての大宮邸を改修して源殿と藤原姫夫婦が住んでいる。二人にとって幼少の頃から馴染んだ家であり、珍しい設定のような気もするが、意外と実際に有り勝ちな事情なのかも知れない。子沢山。42 歳。 \*「夜ごとに十五日づつ」の「じふごにちづつ」はダメ押しだ。「うるはし」は<端正=整然としているさま>みたいな語だが、此处では源殿の律儀さを皮肉った語用。というか、現代語でも全く同様の語用はある。で、「十五日づつ」を言わなくても「夜ごとにうるはしう」で十分に笑えるものを、万一、私のように笑い損ねた人の為に念押しがしてあるのだから、この「十五日づつ」は絶対に笑わなくてははいけない。

\*二条の院とて(二条の優美な院として)、造り磨き(造営し磨き上げ)、六条の院の春の御殿とて(ろくでうのみんのはるのおとどとて)、世にののしる玉の台も(世に名立たる華麗な豪邸も)、ただ一人の\*御末のためなりけり(すべては明石姫の御末裔が国王の栄誉を勝ち取るために光君がお遣し下さったもの)、と見えて(に思えて)、明石の御方は、\*あまたの宮たちの御後見をしつつ(明石御方は何人もの若宮たちの教育監督をしながら)、扱ひきこえたまへり(御養育を世話焼き申しなさっていました)。 \*「二条の院」の「みん」はこの場合は固有名称ではなく、「院とて」で<厳しい構えの一門の貴人の邸宅として>という言い方の一般名詞での語用なのだろう。 \*「おおんすゑ」は<御子孫、末裔>の語用だと思うが、「ただひとり」は何を意味するのか。言葉の意味は範囲の限定ではなく<唯一>という指定であり、一族や家の繁栄ではなく絶対的な存在を意味しており、それは即ち唯一絶対の<国王>に他ならない。が、源氏は王家から臣籍降下した氏であり、つまりは王家では無い。が、后としての血縁は子を王に頂く事が出来る。ということは、この「ただひとり」は明石中宮であり、それは光源氏から見て<明石姫>という愛娘だ。 \*「あまたの宮たち」は、二条院に住む三の宮、六条院南町東の対に住む女一の宮、南町寝殿に遊び部屋を持つ二の宮、のことなのだろう。「うしろみ」は企画管理。「あつかひ」は実施業務。

大殿は(おほいどのは、源大殿は)、いづかたの御ことをも(どちらの御部屋様方にも)、昔の御心おきてのままに(故光君の御意向を)、\*改め変ることなく(変えずに)、あまねき親心に仕うまつりたまふにも(皆に親切にお世話申し上げなさるにつけても)、 \*「改め変ることなく」と言っても、実際の処遇は「さまざま集ひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべき住みかどもに、皆おのおの移ろひたまひし」とあったので、此处での文意は源殿の気持の問題のようだ。

「対の上の(故紫の上が)、かやうにてとまりたまへらましかば(このように生き残っていらっしやったなら)、いかばかり心を尽くして仕うまつり見えたてまつらまし(どれほど熱心にお世話申し上げたかったことか)。つひに(とうとう)、いささかも取り分きて(少しも特別に)、わが心寄せと見知りたまふべきふしもなく(私の好意をお知りなさることも無く)、過ぎたまひにしこと(逝っておしまいになったことよ)」を(とその早世を)、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ(残念に今もなお悲しく思い出し申しなさいます)。

\*天の下の人(都中の人)が、院を恋ひきこえぬなく(故光君を惜しみ申しさぬ者は無く)、とにかくにつけても(あらゆる式典や宴遊に)、世はただ火を消ちたるやうに(行事はもう火を消したやうに)、何ごとも栄なき嘆きをせぬ折なかりけり(すべて精彩を欠いて悲しみの無い時は無いのでした)。 \*「あめのした」は狭くは内裏の宮中の御所内で、広くは日本国中だろうが、当時の情報伝達機能から推して知る社会事情の伝播の早さと広さからして<京都中>と見て置く。また、此处までの語り口からは、光君の没

直後の大きな動揺や混乱や悲しみは感じられないが、かといって、あまり時間も経っていない、忌明け直後かそれに近い時期くらいの話に聞こえる。

まして、\*殿のうちのひとびと(まして源氏殿の御家中の人々)、御方々(御部屋様方)、宮たちなどは(御孫の宮様方などは)、さらにも聞こえず(改めて申すまでも無く)、限りなき御ことをばさるものにて(いつまでも殿のご逝去をお嘆きなのは当然として)、またかの\*紫の御ありさまを心にしめつつ(更に十年前に亡くなった紫の上の御姿が偲ばれて)、よろづのことにつけて(四季の移ろいにつけてのあらゆる催事に)、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし(その愛らしさを思い出し申さぬ時はありませんでした)。春の花の盛りは(桜の盛りは)、\*げに(確かに紫の上の早世が示す如く)、長からぬにしも(このように晩春に永らえず散ってしまうのも)、おぼえまさるものとなむ(特に印象深いものなのです)。 \*「とのうちのひとびと」は注に<『集成』は「お邸に仕える人々。「殿」は、六条の院、二条の院、それに東の院も含めてどうか」と注す。>とある。 \*「むらさき」については、注に<語り手(作者)は地の文では「紫」と呼称する。>とある。この物語りでは全般に故人に対する敬語は、確かに意外なほど簡素化される場合が多いように思えて、死者に対する客観視は当然としても、当時の人が事物を現代人と同じように客観視出来ることに改めて気付かされるような、そうであれば当時の人にとっても、いかに身分制度の実際の生活感が窮屈で重いかを、逆に生存中の貴人に対する敬語遣いの複雑さから垣間見る思いだ。 \*「げに」は語り筋からすれば<正に桜人だった紫の上の早世が示すように>を意味する言い方に見えるが、当然に、現下の「春の花の盛りは長からぬ」という風情に掛かっているこその「おぼえまさる」という論理なので、今が<桜の散る頃=晩春>である事を示している。